
聖夜と赤と粉塵と

界 宰 天

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

聖夜と赤と粉塵と

【Nコード】

N0772D

【作者名】

界牢 天

【あらすじ】

村川正零は、クリスマスの夜に人を待っていた。そして、ある『悲劇』が幕を開ける。密偵者、スパイゾーンの側根のような物語。

(前書き)

もしかしたら、ちょっとグロ描写があるかもしれませんが。
『明らかにグロイ』と思われた方は連絡を。

「……遅い」

むらかわせいむ

村川正零は、ベンチに座って人を待っていた。

辺りは夜だというのに明るく、人もにぎわっていて、装飾が施された大きなモミの木が所々に設置されているし、赤と白の帽子とコートを着た大人がケーキを売っている。

今夜はクリスマスだ。

クリスマスはキリストの誕生日だということは、素人の正零でも分かっている。しかし、他人の誕生日に何故自分がプレゼントをもらえるのかは分からなかった。まあ、もらえるものはもらっておくが。

それにしても、遅すぎる。

待っているのは、同じ学校の不良仲間の派座はざなれんじ那連次と、ネットで知り合って今日はじめて会うガブリエル（ハンドルネームらしい）。

本名だったら変だが。まあ、連次とはしばらく待ってれば会えるだろうが、ガブリエルはどうしようか、と悩んでいると、『目印として赤い十字架を首から提げている』と言われていたのを思い出した。

正零は、その辺のアクセサリー屋からとことん値切って買った安物の十字架をかばんから取り出し、首から提げる。しかし、首から十字架を提げている人は他にもいるので、目印としては心もとない。右前の方にいる挙動不審な女をぼーっとしながら眺めて、ガブリエルって男っぽい名前だからこいつじゃないだろうな、と思いつつ、上を見上げる。すると、

「ゼロきゅーん まったせったなー」

と言う声とともに、額に肘打ちを食らった。

「……っつー。テメエ！いきなり何しやがる連次！」

肘打ちを放ったのは、連次だった。

彼は、赤い帽子に赤いコート、さらには大きな白い袋という、なんとサンタクローヌな服装でやってきた。何気に袋の口を縛っている紐にはトナカイの人形がくくつてある。

「……うわぁ、ずいぶん楽しんでるな、お前」

「なーに言ってるんだー せっかくのクリスマス、楽しもうぜー」
ぐるぐると回る不審者…もとい連次にあきれ、少し目線をそらすと、目の前には先ほどの拳動不審女の顔が目の前にあった。

「うおおッ!」

ちよつと近寄ればぶつかりそうな距離だったので、正零はあわてて体を反らせる。

「貴様。ゼロか?」

女が言った。ゼロ、と言うのは、正零のハンドルネームである。

「あん?そうだけど、何で知って……うおおッ!」

正零が言い終わる前に、女は正零の膝に手を置き、さらに身を乗り出す。よくよく見ると、この女はなかなかきれいな顔立ちで、ふんわりとシャンプーの香りが漂ってきたので、正零の体は一気に硬直した。

「首に赤の十字架…間違いないな。私がガブリエルだ」

女が男みたいな口調で言った。

「はぁ!?ちよつと待て、お前がか?」

「ガブリエルと言うのは本来旧約聖書の天使で、容姿は女の姿で描かれることが多い。何か不満があるのか?」

正零がいくら身を引こうと、それにあわせてずいずいとガブリエルは顔を寄せてくる。もうちよつとで額がぶつかりそうになった時、天の助け《……》が横から来た。

「ごらぁぁぁぁ!イチヤついてんじゃねえぞゼロおおお!」

まあ、来たのは連次の肘打ちで、当たったのは正零だったのだが。すさまじい威力の肘打ちは、正零のこめかみに打ち込まれ、一気にベンチから転げ落ちた。

「……む?何故あぁなつたかは知らんが大丈夫か?」

「大丈夫というかむしろ危機から逃げれた。ありがとう連次」

こめかみを押さえながら、正零は立ち上がる。そして、

「でも凄く痛かったからテメエもくらつとけやコラア！」

とりあえず、爪先を連次の鳩尾みぞおちにねじ込んだ。いた。

「こつ………かつ……げが……」

少し呼吸困難に陥っている連次に背を向け、ガブリエルの方を向く。

「いや悪い悪い。んで、名前何よ？」

「……冬坂晴菜ふゆさか はれなだが、暴力はいかんぞ？よりによってキリスト様の

誕生日に」

どうやらこの女……冬坂は、キリスト教徒のようだ。

正零も自己紹介をし、呼吸が復活した連次と夜の街を歩き回る。

「でさ 近い将来、二次元が三次元に実現するのも夢じゃないらしいぜ」

「なんかすごいな。つーことは、人が生身で空飛んだりなんか凄いの出したりするの？」

「む。魔術にも様々なものがあるのだが、それはどうなるんだ？」

ヨハネの黙示録』に登場する御使いはラツパを吹き鳴らすだけで地球の三分の一を焼き払ったぞ？」

いつもならたいたことのない会話になるのだが、そちら方面に詳しい冬坂が話に加わると、妙にいつもと違った感じがする。なんか新鮮だ。

「……あん？あれってお馬鹿さんたちじゃね？」

連次の発言に、正零が振り向く。指を差している方を見ると、そこには、正零の不良仲間にしゅつちゅうちよつかいを出してくる、他校の不良集団がいた。いつも秒殺しているのに学習せずに向かってくることから、もうあだ名が『馬鹿』になっている。

「……ほんとだ。何やってんだらうな」

見ると、五人中全員が大きなバックを担ぎ、辺りをきよるきよると見回していた。まあ、何をしようか問題ないか、と思いい、適

当なデパートに足を運ぶ。

「うおっ！すげえ！サンタ式ソリだ」

「むっ！キリスト様のイラスト付きポスター！？これは買うしかないッ！」

なぜか正零からみれば妙なものに興味を引かれている二人を適当に眺めつつ、正零は雑誌を手に取り、ぱらぱらとめくる。しかし、大して興味深い記事もないので、ページを閉じてもとの場所に戻す。辺りはクリスマスムード一色で、食品売り場には鳥の丸焼きが売られていたりする。

「おいおい オマエ何しに来てんだよ 楽しもうぜー」

いつも以上に上機嫌な連次がステップを刻みながら話しかけてきたが、特にこれと言った目的もなかったりする正零はどうとも答えられない。

「することがないのなら、私と共にこちらに來い。なに、大して時間にかかるわけでもないからな」

声のした方向を向くと同時に、がしり、と冬坂に腕をつかまれ、一気に引つ張られた。

「うおおっ！ちょ…ちょっと待て！それはいいが落ち着いてくれ頼むから って痛い！痛いって！」

問答無用で引きずられていく。後ろのほうから連次の叫び声が聞こえるが、周りの音楽で聞き取れなかった。

引きずられた先には、洋服売り場があった。

そして、正零は試着室の前でぼーっとしていた。

試着室のカーテンが、シャーッと開き、中で着替え終わった人物の姿をあらわにする。

「ど…どうだ？似合うか？」

試着室から冬坂の姿が現れ、その姿を見て、正零は一瞬、鼓動が早くなつたような気がした。

もちろん、冬坂が着替えていることは知っていたのだが、問題は
その姿だ。

先ほどまで質素なジーンズを穿き、上には黒のトレーナーと上着
と言う格好をしていたのだが、現在は淡い緑を基調とした服で、先
ほどとは違ってやわらかいイメージが出ていた。

「…似合うぞ。割と驚かせてもらいましたよ」

正零が正直にそう言うと、冬坂は顔を赤くしながらも安心したよ
うな顔をしていた。

「後は口調が女らしければなあ……」

「なっ……変なのか？直したほうがいいのか？」

本当は、言った瞬間にぶん殴られるかと思つた正零だったが、意
外と普通の反応だったので安心した。

「まあ、良いんじゃないかねえの？個性だし」

「そ、そうなのか…？そういう物なのか？」

「変えたきゃ変えればいいし、変えたくなければそれでいいと思つ
ぞ？」

何度も何度も聞いてくる冬坂に、適当に答えておく。
と、

すさまじい爆音が、鼓膜と日常を引き裂いた。

「な……なあッ！？」

ガラガラと何かが砕ける音が聞こえたが、この状況では判断でき
ない。周りからは絶叫が聞こえ、逃げ惑う人々の足音が聞こえる。

「チイツ！テロか！？逃げるぞ！」

「え…あ、ああ」

正零は叫びながら、冬坂の腕を引く。

建物が完全に崩れていないところを見ると、柱は破壊されていな
いようだ。最近は技術の進歩で衝撃分散システムなども開発されて
いるので、多分このような大型の施設には取り付けが義務付けられ

ているのだろう。

正零は走るが、冬坂がいるので全力疾走することは出来ない。さらに、このビルの構造を全て把握しているわけでもない。

よって、逃げる速度は相当低下する。

しかし、正零は決して、冬坂を見捨てない。

実際に会ったのは今日が初めてだが、メールなどでの会話はして、いて、凄く印象がよかった。実際に会って、なぜかは知らないが、凄く印象がよかった。

だから、見捨てない。

しかし、だれがこんなことをしたのだろう。

現在、この国は世界最高峰の技術力を持って、戦争は仕掛けられないけれどやれば一月で相手を降伏させれるほどの兵器を作れる。そんな国に向かってテロなど、まずないだろう。では自殺に巻き込んでやるとか思ったどっかのバカがやったのか？と思ったとき、

「……ん？バカ？」

思い出したのは、馬鹿…他校の不良連中が背負っていたバックだった。

中には、何か大きなものが入っているように見えた。

そして、何かおびえたような顔をしているような気がした。

見つかる《……》ことへの恐怖の顔を。

「あいつら……ッ」

正零は忌々しげに舌を打つ。

何が目的かは分からないが、おそらくあの中身は爆弾か何かだろう。

普通の人が考えたら、まずありえないことだ。

しかし、あいつらならありえると思った。

「冬坂、先に逃げて。やる必要がある」

「え……いや、しかし……」

冬坂に言っと、少しためらったような顔をした。それで、安心した。

「…やさしいな、お前。ほら、行って来い！」

正零は言っと、冬坂の肩を押し、すぐさま防火扉で二人の間を引き裂く。

逃げ遅れた人がいても、小さな一方通行の扉があるから、まず大丈夫だ。

「な…ゼロ！」

「すぐ戻る……つか、いい加減本名でよろしくな」

そして、正零は走り出した。

爆破地点は、地下の様だ。単なる勘だが。

意外と、目的の人物は地下にいた。

「よお、村川正零」

呼びかけに答える必要などない。

行動不能にして、ここから出てからじつくりと吐かせる。

正零は自慢の脚力で間合いを一気につめ、本気の蹴りを相手の額に打つ。

嗚咽が聞こえるが、無視する。

鳩尾を蹴り、相手がうづくまるのを確認してから、後頭部にかかとをねじ込む。

うつぶせに倒れた相手の片足を踏み砕き、一人での移動は不可能にする。

悲鳴は無視した。

続いて両腕も踏み砕き、反撃を不可能にする。その後、他の爆弾の危険性も考え（馬鹿は5人だったし）早めに引き下がろうとする。

「正零ッ！」

冬坂の声が聞こえた。

振り向くと、そこには予想通り冬坂がいた。

こんな危険な状況にもかかわらず、彼女は正零の姿を見て安堵の表情を浮かべた。

馬鹿だ、と思う。

そして、再度響く爆音。

柱が砕かれたようだ。流石に衝撃吸収といえども、民間施設に使われている辺りからこのような衝撃には耐え切れなかったのだろう。

天井が崩れる。

「クツ……………ソオオオオオオオオオ！」

正零は走り出す。

目の前の少女を、瓦礫から守るために。

少女の盾になるべく、走る。

粉塵が、辺りを覆った。

赤い液体が、粉塵に混じった。

薄れ行く意識の中、正零はうつぶせの状態で目を開く。

目の前には、一人の少女が横たわっていた。

腹部からおびただしい量の血を流しながら。

「チク……………シヨウが……」

体力の浪費になると分かっているけど、

「クソツタレがあああああああああああッ！！！」

叫ばずには、いられなかった。

結局、守れなかった。

嘆いているときに、ふと、ゆっくりとした痛みを腹部に感じた。

そこを見ると、石の柱が、真っ赤な塗料をつけて肉の土台で立っていた。

「あ……………はは」

不意に、笑ってしまった。

体力の浪費どころではない。死は確実と思っている。

他を守るところか、自分も守れないでどうする、と、自分のこと

が馬鹿馬鹿しく思えた。

がら、と瓦礫を踏む音がした。

救助ではないと思った。足音はひとつだ。

「やあ、村川正零君？」

男の声が聞こえた。しかし、返答する体力はもう削られていた。

「散々なクリスマスだったね？守りたいものも失い、今自分の命も失おうとしている」

それがどうした、と思う。

「そんな不幸な君にとってもいい提案だ。僕の元へ来い」

何を言っているのか、分からない。

「僕の元に来れば、生き残れる。それどころか、守りたいものを守る力もあげれる」

何故いまさら、そんな力が必要なのか、わからない。

「どうだい？きみには素質がある。僕の元へ来い」
けれど、

正零の指先は、血で『yes』と書いた。

「歓迎するよ、村川正零」

『スパイエリア
密偵者養成学校』にようこそ

その言葉を聞いて、少年の意識は途切れた。

「な……何だオマエは！」

ナイフを持った男が言った。

「はい。私は『スパイエリア
密偵者養成学校』特待生、村川正零です」
少年が、無機質な声で答えた。

「くそっ…来るな！」

男がナイフを振り回した。

「以来遂行のため、対象人物を破壊します」

心を失った少年は、『人形』のような『人間』になった。

人形のような人間は、紐に操られるがごとく動き、いくつもの心を壊した。

大切なものを守りたかった、と思う心も失った少年は、何か考えることも許されなかった。

しかし、何かするべきことがある、という虚ろな記憶は、それだけが残っていた。

(後書き)

はい、界牢です。

なんかもう最後のほうですね、ハイ。

いろいろとゴメンナサイ！

つてかこれ本編（密偵者）見てる人でもわかんないですね。はい。

まあ、今後いろいろとリンクしていくつもりなのです。

では、界牢でした。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0772d/>

聖夜と赤と粉塵と

2009年3月24日09時01分発行